

# サンスクリット本城邑経 (nagara)

——十支縁起と十二縁起 (その一)

村上真完

もくじ

一 はじめに——問題の所在

註

二 サンスクリット本城邑経 (nagara) に関する従来の研究

註

三 サンスクリット本城邑経 (nagara) の復元について

一 はじめに——問題の所在

縁起説の資料として、パーリ *Samyutta Nikāya* (『相應部』以下 S と略記) の第二卷 (Nidāna-vagga 因縁品) の *Nidāna-samyutta* (因縁相應) および、漢訳『雜阿含經』卷第十二、十四、十五初とは、重要である。求那跋陀羅が四三三年頃に訳出した『雜阿含經』五十卷は、訳出後に經の配列順序が乱されて現在に伝えられているといわれる。椎尾辨匡博士は『雜阿含經』(以下『雜阿含』という)の經の配列を改め、整理分類して、『校訂相應阿含經』とも名づけて、『國訳一切經』の初の三巻におさめた。そして卷十二、十四、

さて、それらのサンスクリット資料も、もとより完全とはいいがたいが、仏教研究にとって無視しえないものと、考えるものである。パーリ資料では明らかでなく、漢訳資料では気づかれないでいる問題の手掛りが、サンスクリット資料の研究によって、見出されることもあるのである。本稿の扱うところも、その一例となるであろう。

『雜阿含』卷十二の第五經(『大正新脩大藏經』(以下「大」と略記)では二八七番目の經。大二、八〇中一八一上)は、椎尾博士によって、「城邑経」と名づけられている(『國訳一切經』阿含部一、二八三—二八五頁。椎尾博士による通し番号一一八六一)。これに対応するのはパーリ *S. XII Nidāna-Samyutta 65 Nagaram (S. Part II. pp. 104-107)* であるが、かなりの相違もある。

玄奘訳『縁起聖道經』(大 No. 714, 一六、八二七中—八二八下)(以下玄奘訳という)

支謙訳『貝多樹下思惟十二因縁經亦名開城十二因縁經』(大 No. 713, 一

六、八二六中—八二七中)(以下支謙訳という)

法賢訳『仏説旧城隍經』(大 No. 751, 一六、八二九上—八

三〇中)(以下法賢訳という)

も、『雜阿含』(二八七)城邑経に相当し、比較的よく一致する。やはり、

『增壹阿含經』卷三一(三八・四)(大二、七一八上—下)

サンスクリット本城邑経(村 上)

十五初を一括して「因縁相應」と名づけている。

『雜阿含』の原本はサンスクリット文であるといわれている。『雜阿含』所屬のサンスクリット文は、断片的ながらも、発見され、公表されている。<sup>(1)</sup> 中央アジア(東トルキスタン)発見の雜阿含所屬サンスクリット文は、*ジュッセルン Pischel, Kuln Hoernle, レヴィ S. Lévi, フサン L. de la Vallée Poussin* によって、<sup>(2)</sup> 解決公表されてきたが、とくに、<sup>(3)</sup> *Le Poussin* によって、<sup>(4)</sup> 解決公表されてきたが、とくに、<sup>(5)</sup> *Le Poussin* のワルトシュミット *E. Waldschmidt* の公表によって、『雜阿含』の因縁相應その他に相当するサンスクリット本(十數経)が手近に見られるようになった。また氏の弟子トリパーティー *Ch. Tripathi* によって改めて因縁相應の二五經のサンスクリット文が解説され復元された。<sup>(7)</sup> 一方、『雜阿含』所屬のサンスクリット文としては、煉瓦に刻されたものが、インド本土より発見され、研究公表されている。<sup>(8)</sup> またネパール発見の貝葉にも『雜阿含』のサンスクリット文があって、<sup>(9)</sup> *フサン L. de la Vallée Poussin* によって解説公表されている。<sup>(6)</sup>

も、城邑経に比較対照さるべき内容を有している。但しこれは城邑経とかなりの相違がある。

「城邑経」は仏の成道時における思索の過程を記す形をとっており、その思索の内容は縁起説である。すなわち縁起成道説の一つである。<sup>(10)</sup>

縁起成道説の中、十二縁起を記すものについて見ると、パーリ「相應部」因縁相應第四經や第十經 (*S. II. pp. 5-7, 10-11*) では、世間の苦を顧じたあとに、次のような二種(四通り)の觀察を記す。

A ①『一体何があれば老死があるのか。何によって老死があるのか。』——『実に生があれば老死がある。生によって老死がある。』以下同様にして、生・有・取・愛・受・触・六処・名色・識・行・無明までたどり、

②『無明によって行あり、行によって識あり、……このようにこの全苦聚の集起 (*samudaya*) がある。』

B ①『一体何がなければ老死がないか。何の滅によって老死の滅があるか。』——『実に生がなければ老死はない。生の滅によって老死の滅がある。』……以下同様にして『無明の滅によって行の滅がある』というまでたどり、

②『無明の滅によって行の滅あり、行の滅によって識の滅あり……このようにこの全苦聚の滅 (*nirodha*) がある。』

以上の四通りの観察の中、Aを順観、Bを逆観と呼ぶのが普通のようになって<sup>(11)</sup>いるが、今はとらない。經典自体はA、Bをそれぞれ、samudaya(集)′ nirodha(滅)<sup>(12)</sup>′ anuloma(順)′ patiloma(逆)<sup>(13)</sup>あるいは acaya(増)′ apacaya(滅)<sup>(14)</sup>と呼ぶ。大毘婆沙論卷二四(大二七、一二五中)によれば、Aを流転分、Bを還滅分と称している。いまはこれによることにしたい。また同書によれば、②を順観察、①を逆観察と称し(卷二三、大二七、一一九中)、または②を順観、①を逆観と称している(卷二四、大二七、一二四上)。いまはこれによる<sup>(15)</sup>。

さて、『雑阿含』の「城邑経」は、玄奘訳、支謙訳、法賢訳と同様に、流転分では老死より識まで(逆観)、識より老死まで(順観)の十支縁起であるのに、還滅分では老死より無明まで(逆観)、無明より老死まで(順観)の十二縁起としている。これが玄奘訳、法賢訳をも含めて、「城邑経」類の特徴をなす縁起説である。しかしながら、パーリでは流転分逆観、同順観も、還滅分逆観、同順観も十支縁起とする。『増吉阿含』はすべて十二縁起とする<sup>(16)</sup>。この二者は縁起説については他の四本と異なるわけである。

十二縁起の中の、無明と行とを除いたのが十支縁起である。この十支縁起を説く例としては、<sup>(17)</sup>きぢのパーリ S. XII. 65 nagaramのほかに *Digha Nikāya* (以下 D) xiv Mahā-

padāna Suttanta (大本経)およびそれに相当するサンスクリット本は成道説に関する。この外、蘆の束の比喩で知られる S. XII. 67 Nalakapīyam (S. II. pp. 112-115)′ これに相当する『雑阿含』(二八八)′ およびそのサンスクリット文も十支縁起を説く好例である。また十支縁起より更に六処を除いた九支縁起を説く D. XV. Mahānidāna Suttanta (大因縁経)もまた、識におわる(また、はじまる)縁起として、十支縁起と関係ぶかいようだ。

ところが、流転分のみが十支縁起で、還滅分が十二縁起であるのが城邑経の特徴である。これは縁起説を考えるにあたって重要な材料と考えられる。しかもこの縁起説は馬鳴の『仏所行讚』卷三(大四、二七下—二八上)′ *Buddhacarita* チベット訳<sup>(18)</sup>第十四章にもうかがわれるし、『大毘婆沙論』卷二四にも、この縁起を説く契経が引かれて論ぜられている(大二七、一二四上、一二五上)。また、浮陀跋摩訳の『毘婆沙論』卷一三(大二八、九七中下)や、『順正理論』卷二九(大二九、五〇四下—五〇五上)にも引用文はないが、この種の縁起説への言及がある。

しかしながらこの「城邑経」は縁起説の考察において、あまり注意されて来なかった<sup>(19)</sup>。その理由の一つは、「城邑経」は漢訳のみに伝えられるにすぎない、と考えられたからである。しかし、現今では、この「城邑経」の原本たるべきサン-

スクリット本を回収することが出来るようになった。また、以下に詳しく見るように、管見の及ぶところでは、現在まで公表されているこの「城邑経」のサンスクリット文は、Ch. Tripāṭhi による復元本をも含めて、完全ではなからず、しかし、筆者の見るところでは、よりき復元は可能である。このことについてはかつて簡単に論及したこともあるが、くわしく述べるいどきを有しなかった。そこでまず、「城邑経」サンスクリット文の回収復元の問題をとりあげ、次にその意味と思想史上の問題を考える、という順序をとりたう。

註

(一) 山田龍城『梵語仏典の諸文献』(平樂寺書店一九五九年)

83—86ページに当時までに公表された文献が整理されている。

また筆者もその後に公表された文献を整理分類してあげた。(国訳一切経印度雑持部・月報『三蔵』の「阿含に關するサン

スクリット資料についで」昭和44年12月)。

(二) Richard Pischel: Bruchstücke des Sanskritkanons der Buddhisten aus Idyikutšari, Chinesisch-Turkestan, SBAW Pt. 1, 1904, pp. 807-827.

Do: Neue Bruchstücke des Sanskritkanons des Buddhisten aus Idyikutšari, Chinesisch-Turkestan, SBAW 1904, Pt. 2, pp. 1138-1145.

(三) A. F. Rudolf Hoernle: *Manuscript Remains of Buddhist Literature found in Eastern Turkestan*, vol.

サンスクリット本城邑経(村 上)

1, Oxford 1916.

(四) Sylvain Lévi: Textes Sanscrits de Touen-Houang. Nidāna-Sūtra. -Dacebala-sūtra. -Dharmapada. Hymne de Mārtceya, JA 1910 (II) pp. 433-456.

(五) L. de la Vallée Poussin: Documents sanscrits de la Seconde Collection M. A. Stein, JRAS 1911, pp. 772-777, 1063-64.

Documents sanscrits de la Seconde Collection M. A. Stein (Fragments de la Samyuktāgama), JRAS 1913, pp. 569-580.

(六) Ernst Waldschmidt: *Bruchstücke Buddhistischer Sūtras aus dem Zentralasiatischen Sanskritkanon* 1, Kleinere Sanskrit-Texte Heft 4, Leipzig 1932.

○Identifizierung einer Handschrift des Nidānasamyukta aus den Turfanfunden, ZDMG 107, 1957 pp. 372-401.

○Sūtra 25 of the Nidānasamyukta, BSOSAS. vol. 20, 1957, pp. 569-579.

○Ein Fragment des Samyuktāgama aus den „Turfanfunden“ (M476), NAWG. 1956 Nr. 3, pp. 45-53.

○Ein zweites Daśabalasūtra, MIO VI, 1958, pp. 382-405. Zur Śroṅakotīkaraṇa-Legende, NAWG 1952 Nr. 6. Das Uṣasenasūtra, ein Zauber gegen Schlangengeiß aus dem Samyuktāgama, NAWG 1957 Nr. 2.

Kleine Brāhmi-Schriftrolle, NAWG 1959 Nr. 1.

- Drei Fragmente buddhistischer sūtras aus den Turfanhandschriften, *NAWG* 1968 Nr. 1, pp. 16-26.
- (○) 田代因縁相応に屬するの。なほ本稿末の附記参照
- (7) Chandrabhai Tripāthi: *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamyukta*, Deutsche Akademie der Wissenschaften zu Berlin Institut für Orientalforschung Nr. 56, (Sanskrittexte aus den Turfanfunden herausgegeben im Auftrage der Akademie von Ernst Waldschmidt, VIII) Akademie-Verlag Berlin 1962.
- (8) V. A. Smith and W. Hoey: 'Buddhist Sūtras inscribed on Bricks found at Gōpālpur in the Gōrākhpur District, *Proc. Asiatic Society of Bengal*, 1896 pp. 99-103.
- E. H. Johnston: 'The Gopalpur Bricks, *JRAS* 1938 pp. 547-553.
- N. P. Chakravarti: 'Two Brick Inscriptions from Nalanda, *Ep. Ind.* XXI, 1932 No. 32, pp. 193-199.
- 平野(=村 上) 真宗「因縁相応の梵文資料—印度古塔出土の煉瓦銘文の内容比定—」『印度学仏教学研究』第十二卷一号、昭和39年、一五八—一六一頁) 参照。
- (9) L. de la Vallée Poussin: 'MSS. Cecil Bendall, *JRAS* 1907, pp. 375-379.
- (10) 平野(=村 上) 真宗「縁起成道説資料」『印度学仏教学研究』第十二卷一号、昭和40年、一八七—一九二頁) 参照。

- skrit, Vergleich mit dem Pāli nebst einer Analyse der in chinesischer Übersetzung überlieferten Parallelversionen, Teil I (Der Sanskrit-Text im handschriftlichen Befund) *Abh. d. deutschen Akademie d. Wissenschaften zu Berlin*, KI. für Sprachen, Literatur u. Kunst, Jahrg. 1952 Nr. 8, 1953; Teil II (Die Textbearbeitung), Jahrg. 1954 Nr. 3, Akademie-Verlag, Berlin, 1956.
- (8) Ch. Tripāthi: *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamyukta*, Sūtra 6: nadakalāpika, pp. 106-114.
- (9) 『影印北京版西藏大藏経』 p. 148a-d. F. Weller: *Das Leben des Buddha von Āśvaghōṣa, Tibetisch und Deutsch*, Leipzig 1926, (Text) p. 240-246 (XIV. 54-55), (Übersetzung) pp. 142-144.
- また『仏本行経』巻三、大四、七八下参照。
- (20) 「城邑経」をとりあげて、無明、行が還滅分のみに加えられたことに最初に注意したのは、武内義範教授「縁起説に於ける相依性の問題」(『京大文学部五十周年記念論文集』昭和31年) であらう。

二 サンスクリット本城邑経 (nagara) に  
関する従来の研究

ペリオ P. Pelliot 探検隊が燉煌付近の Tsien fo tong (千仏洞) の洞窟から得た七枚の写本(断片)を、S・レヴィが一九一〇年に解説して公表した中に、*Nidāna Sūtra* が

- (11) 宇井伯寿「印度哲学研究」第二、二九九、三〇二頁。和辻哲郎「原始仏教の実践哲学」(『和辻哲郎全集』第五卷) 二四〇頁。なお三枝充憲氏は生観、滅観の語を用いている(「縁起の考察」『印度学仏教学研究』六一—一三四頁)。
- (12) 前記の「相応部」の例がこれを示している通り、多くの例がみられる。
- (13) *Udāna* pp. 1-2.
- (14) V. A. Smith and W. Hoey: 'Buddhist Sūtras inscribed on Bricks found at Gōpālpur in the Gōrākhpur District, *Proc. Asiatic Society of Bengal*, 1896, pp. 99-103 に公表された『雑阿含』(三五八)(権尾一一八九六無明増縁)に對比されるサンスクリット本。
- (15) この①と②を宇井伯寿博士は自然的順序と逆的順序として『印度哲学研究』第二、三〇六頁)、木村泰賢博士は往観、還観として(『原始仏教思想論』二四九頁)、舟橋、哉博士は推理的順序、説明的順序とする(『原始仏教思想の研究』七三頁)が、今ではならぬ。
- (16) 但し些細に見ると、流転分の順観の終りは「生縁死、死縁愁憂苦惱」というから十三支となる。また還滅分の順観の終りは「生滅則老病滅、老病滅則死滅」(但し三本によれば「生滅則老病死滅」とのみいう)というから同じで十三支となる。しかし逆観の場合にはそれより十二縁起である。
- (17) E. Waldschmidt: *Das Mahānādasūtra, ein Kanonischer Text über die sieben letzten Buddhas*, San-

あった。その経名は写本にはないのであったが、レヴィは内容から判断して、経名を考えたのであらう。これはレヴィが指摘した通り、『雑阿含』城邑経等に於たる。その写本は t (裏) ' s (表・裏) ' r (表と裏) の三枚五頁から成り、以下次節に見る 1 から 4.1 まで、及び 18.1 から 29 までの内容を有する。すなわち、仏が無上正等覚を未だ悟らないうちに、老死は何を縁としてくるか、を考察し、(二枚分の脱落の後) 『取がなご有はならぬ』ならぬ、『無明がなご諸行はならぬ』というまで考察し、さらに『無明の滅』から『老死の滅』までを観察する。そして、『古来の道、古来の轍』に到達した、と思う。という内容を含む。この不完全な断片的な写本の内容を城邑経(等)に比定したのは、S・レヴィの炯眼であった。

一方、北インドのゴラクプル Gorakhpur 地方のゴールプル Gopalpur 村の一古塚 Mañjarīyā mound の地下室から発見された、四個の煉瓦に刻まれたサンスクリット文は、はじめ一八九六年に、スミス V. A. Smith とホーエイ W. Hoey によって、報告され、その第一の煉瓦の刻文の解説が行われた。後に一九三八年に、ジョンストン E. H. Johnston は第二、第三の煉瓦の刻文を解説して公表し、さきのスミスとホーエイの解説に訂正を試みている。年代については、スミスとホーエイは三、四世紀、ジョンストンは

五〇〇年頃と推定している。

ジョンストン公表の Brick II, III は一つの經典であるが、はじめと終りの部分を欠く。縁起を主題とするが、はじめを欠き、テキストは触からはじまり、触から識まで、識から老死まで、縁起の流転分を觀察する。思うに老死から識へと廻って縁起を觀するのであろう。すなわち、流転分では十支縁起である。しかし、還滅分では、老死から無明の滅へ、無明の滅から老死の滅へと觀する十二縁起となっている。その内容は後に見る城邑経サンスクリット文の 10.2 から 27.1 に相当するものである。

ジョンストンはこの經の類例を *Buddhacarita* (『仏所行讚』) xiv, 52-83 および *Lalivastara* (ed. Lefmann) pp. 346-8 に求め、とくに前者 (xiv, 73) はこの煉瓦刻文の縁起の流転分 (anuloma) の終りの文を再現しているから、作者 *Aśvaghoṣa* (馬鳴) は、この經文あるいは類似の文を知っていたにちがいない、と提案する。*Lalivastara* の成道の記事は流転分、還滅分ともに十二縁起であって、この刻文とは一致しない。ジョンストンも気づいていた通り、流転分が十支縁起、還滅分が十二縁起というのが、この刻文と *Buddhacarita* とが一致する点であるが、後者は韻文であり、この刻文は散文であって、同一本とは考えられないのである。

28-79) は貴重である。第二部 (pp. 83-210) は因縁相應二五經のテキスト校訂(復元)およびそのドイツ語訳である。第三部は文献一覽と略記号、第四部は四種の索引から成る。全体で A 4 版二三八頁から成る労作である。

『雜阿含』城邑経に相当するのは、第五經である (pp. 94-106)。Tripathi は *nagara* (= *nidāna*) *sūtra* と名づけて *na. nagara* (城邑) という経題は写本 S 474 Blatt 9 R 7 (p. 37) による *uddāna* (撰頌。章末の目次に相当する詩節) によって確認される。そしてこれはパーリの経名にひとしい。この第五經に所属する写本類は数多く、発見地も北道の処々にわたっている。Tripathi がこの第五經の写本として解読したのは二十三種の写本に及んでおり、その他彼は前記のレヴィの解読したものを参照している。しかしながら、この第五經の全文は回収されなかったのである。しかも残念ながら、彼はワルトシュミットと同様、さきに見たジョンストン公表のゴーパール煉瓦刻文 II, III に気づいていなかった。(尤もゴーパール煉瓦刻文を用いても、そのままではなおこの經の全文を得ることはできない。) また彼は復元にあたって、漢訳の『雜阿含』(二八七)城邑経等をも参照しなかったようである。そのためあつてか、彼は縁起の流転分も還滅分をも十二縁起として復元している。尤もこの復元したテキストは流転分において行、無明を加える十二縁起

この刻文は『雜阿含』(二八七)城邑経等に対応することを私はさきに指摘した<sup>(4)</sup>。

ドイツ探検隊が東トルキスタン北道から発掘した写本類の研究に従事していた E・ワルトシュミットは一九五七年に、因縁相應 *Nidānasamyukta* のサンスクリット写本について報告を出した<sup>(5)</sup>。彼は写本 S 474 の Blatt 9 R 6-7, Blatt 15 V 2 に見られる二つの *uddāna* (撰頌。目次に相当する詩節) を紹介し、これによってその順序が知られる、因縁相應の二十一經とそれに続く四經との、合計二十五經の梗概を漢訳『雜阿含』(二八三—三〇三〔以上卷十二〕、三四三—二四六〔以上卷十四])とパーリ相当経との対比をもつて示し、また別に最後の第二十五經を解読校訂して公表した<sup>(6)</sup>。ワルトシュミットは因縁相應のテキストの編集校訂を弟子の Chandrabhal Tripathi にゆだねていたが、一九六二年に、トリパーティーによって因縁相應二五經のサンスクリット文(解読、復元)が公表された。Chandrabhal Tripathi: *Fünfundwanzig Sūtras des Nidānasamyukta*, Akademie-Verlag, Berlin 1962 がそれである。これは序論 (Einleitung) の外、四部より成る。第一部は使用した諸写本の説明、写本の表記の特徴、写本解読、写本と所属經典との対照表から成るが、とくに小断片にまでも及ぶ写本解読 (pp.

とする点に限って言えば、『増耆阿含』三八・四と一致するという結果になっている。しかし、以下に見るように『増耆阿含』はサンスクリット本ともっともへだたっている。縁起説の一部のみ、両者が一致するとは思議であろう。しかも、この復元は彼が解読した写本から帰結できるのではない。むしろ、その個所はゴーパール煉瓦刻文を参照して、別に復元すべきものである。そしてその復元はまた『雜阿含』城邑経、玄奘訳、支謙訳、法賢訳とも、より多く一致すべきものと考える。そこで私はさきに、この城邑経のサンスクリット・テキストの復元について、ゴーパール煉瓦刻文を用いるべきことを唱え、その一部について試案の要旨を発表した<sup>(7)</sup>。その後(一九六七年)、ヨング J. W. de Jong はトリパーティーの右の書に対する書評において、「第五經については E・H・ジョンストンによって公表されたテキスト “The Gopālpur Bricks”, *JRAS*, 1938, pp. 547-553) を参照すべきである」といって、拙稿にも言及している<sup>(8)</sup>。そこで私は次に、この城邑経 (*nagara*) のサンスクリット・テキストの復元を改めて考え、とくに Tripathi と意見を異にするところについては、その根拠を明らかにし、詳しく論及して、大方の批判を仰ぐべきであろう、と考えたのである。

註

(1) JA 1910 (II) pp. 433ff. (前節註 4)

- (2) *Proc. Asiatic Society of Bengal*, 1896 pp. 99ff. (前節註<sup>8)</sup>)
- (3) *JRAS* 1938 pp. 547ff. (前節註<sup>8)</sup>)
- (4) 『印度学仏教学研究』第十一卷一号一五八頁 (前節註<sup>8)</sup>)
- (5) *ZDMG* 107, 1957, pp. 372-401 (前節註<sup>8)</sup>)
- (6) *BSOAS* vol. 20, 1957, pp. 569-579 (前節註<sup>8)</sup>)
- (7) 前節註<sup>8</sup>
- (8) E. Waldschmidt: *ZDMG* 107, 1957, p. 374; Ch. Tri-pāṭhi: *Fundanzanzig Sūtras des Nidānasamyukta*, pp. 14, 37 (S 474 Blatt 9 R 7)
- (9) 『印度学仏教学研究』第十三卷一号一八七—一九二頁 (前節註<sup>9)</sup>)
- (10) J. W. de Jong: *Chandrabhai Tripāṭhi, Fundanzanzig Sūtras des Nidānasamyukta*, III. X-No. 2/3 (1967) pp. 198-199.

### 三 サンスクリット本城邑経 (nagara) の復元について

Tripāṭhi の本は復元はそれなりに意味あるものであろうが、その一部(縁起の流転分)において、行、無明に言及するところ)にせうしては、中央アジア発見の写本の支持もなく、『増壹阿含』を除けば、他の漢訳四本とも一致しないものである。しかも以下に見る如く、『増壹阿含』は他の多くの

部分において、サンスクリット本とももつともへだたるものである。そこで彼が解読した写本に忠実にしたがうと、どのように復元できるか、という観点から再構成を考えてみる。この際には当然 Gopālpur Brick も参照し、漢訳『雑阿含』城邑経とその類本をも比較参照することになる。尤もここに改めて再構成を試みる部分は、この経の一部分にすぎず、大部分については Tripāṭhi が校訂し復元したテキストに従うことになる。しかし今構成を試みるところは、わずか一部分であっても、縁起の考察のためには、無視できない個所であると考えられる。

以下、城邑経(nagara)のサンスクリット本文全文を掲げる。その中、問題の個所は一部分であるけれども、この経の全貌を明らかにし、かつ漢訳諸本との異同を摘記することによって、このサンスクリット本が『雑阿含』城邑経や玄奘訳によく一致することを示して、問題の個所もまた『雑阿含』城邑経や玄奘訳等になるべく一致すべきことを示したいからである。なお以下に示す番号の数字はほぼ Tripāṭhi が記したものに合せてあるが、ある部分においては更に細分してある。Tripāṭhi は復元した部分を丸括弧に入れては、他の材料あるいは彼が解読した写本の転写によって、写本の支持があると考えるところにおいては、括弧を取り去る。

#### 1. evaṃ mayā śrutam eka(smin samaye bhagavañ

śrā)vastyāṃ viharati sma jet(avaṇe 'nāhapiṇḍadasy-āraṃe /)

(atra) bhagavaṇ bhikṣūn āmantray(ati /)

Tripāṭhi (pp. 94-95) は従ふ。同じ写本 387, 1 R, 1-3 は *vaṇe* か、その写本は *va* の経の直前に *siddham* // *vaṇe* (p. 64)。接ぎの写本は *va* の経を単独で記したものである。写本 389, Bl. 1 V, 1 は *va* は *va* の個所は (śrāva) *śrāyā(m) nidānaṃ va* (p. 66)。パーリ (S XII. 65. 1) は *va* 準と Savatthi *va* (S. II. p. 104)。漢訳は『増壹阿含』を含めて、右の文と一致する。しかし玄奘訳本のみは「与大慈弥勒衆千二百五十人、俱及諸菩薩等無量大衆」という語句を付加して、「見大乘經典の形を」とする。

2. *pūvaṃ me bhikṣavo 'nuttaraṇ samyaksambodhim anabhisambuddhasyāikākinō rahasgatasya pratisaṃl(ṭ) nasyāivaṃ cetasi cetaḥparivitaraka udapādi / Tripāṭhi* (p. 95) は従ふ。写本 389, Bl. 1 V, 1-4 (p. 66) は 387, 1 R, 4 (p. 64) の *va* の Lévi 写本 Feuille t v. 3-4 (p. 438) は *va* の右の復元とする。右に菩薩とある語が *va* の *va* は『雑阿含』玄奘訳、法賢訳と一致を示し、パーリ、支謙訳、『増壹阿含』とは相違を示す。

3. *kiccraṃ batāyaṃ loka āpanno yad-uta jāyate 'pi (jīya)te 'pi miriyate 'pi (cya)vate 'py (u)papadya-*

t(e) 'pi/atha ca punar ime sattvā jarāmaraṇasyō(ttare) nīhsaraṇaṃ yathābhūtaṃ na prajānaṃ(ti /)

Tripāṭhi (p. 95) は *va*。写本 389, Bl. 1 V 4-R 1 (p. 66) の *va* は、第三経の写本 S 474 Blatt (1) R 9 (p. 29) Lévi 写本が参照である。同文は『長阿含経』大本経に相当する *Mahāvādānasūtra* 9b2 は *va*。接ぎの原文を復元した E. Waldschmidt は二度の *va* (Das *Mahāvādānasūtra*, II. p. 198; *ZDMG* 1957, p. 396 Anm. 1) の後に写本 S 474 は *va* の右の文の *va* に確定した。『雑阿含』(二八七)のみには右に相当する文がない。漢訳の他の四本およびパーリ本は右に相当する内容を有する。しかし『増壹阿含』のみは「然此五盛陰不可得、尽本原」の一句を加える点で他と異なる。

4. 1 (ta)sya mamāi(tad abha)vat / ka(smin nu) sati jarāmara(ṇaṃ bha)vati/ kimpratyā ca punar jarāmarāṇaṃ /<sup>(2)</sup>

2 tasya mama yoniṣo ma(nas) i k(u) rva(ta) evaṃ yathābhūtasyaḥhisamaya u(dāpādi) /<sup>(3)</sup>

3 jāyāṃ) satyāṃ jarāmaraṇaṃ bhavati/ jātipratyaya(ḥ ca punar jarāma)raṇaṃ /

Tripāṭhi (p. 95) は *va*。写本 389, Bl. 1 R 1-6 (p. 66) は *va*。以下 (4~12) 同じ構文があるが、ここでは

なわち右に三分して示した文の中、1と3とについては、以下において太字体の文字だけが異なるだけで、2は以下まったく同文のくりかえしである。この間、全部完全な写本があるわけではないが、次に掲げる12までは、まちががなく、その構文を考えることができる。もともと、右(および以下)の構文については、若干の異文(variant)もあるので、註記する。ペーリ本および漢訳五本も右に対応する内容を有する。しかし『增壹阿含』のみは、老病死といって病を加える点が異なる。

(1) nu の存在は 5.1; 9.1; 10.1 において明らかである。これは写本 389, BI(2) V 1 (p.67); S 527, BI(3) V 2; R 1(p.72) によっている。しかし、後にもみられる Gopālpur Brick II には nu が無い。

(2) Gopālpur Brick II によれば、このあとに iti を加える。しかし Tripāṭhi 刊本のもので写本 S 527, BI(3) (p.72) には iti は無い。

(3) udapādi の語は 8.2; 9.2; 11.2 に記される。ちなみに写本 S 527, BI(3) V 1; 3 (ただし udapādi は無い。p.72), 389, BI 5 V 5 (p.67) にも記されて記される。しかし、Gopālpur Brick II では「無」に babhūva の語をくみ加える。

5.1 tasya mamāita(d a)bha(vat/ kasmin) nu sati **jātir** bha(vati/ kimpratyayā ca punar **jātiḥ**/)

2 (tasya ma)ma yoniśo (manasi kurvata evaṃ ya-

**vedanā** bhavati/ kimpratyayā ca punar **vedanā**/

2 tasya mama yo(niśo ma)nasi kurvata evaṃ yathābhūtasābhisamaya udapādi/

3 **sparsē** sati **veda**(nā bha)vati **sparsā**pratyayā ca punar **vedanā**/

10.1 (tasya mamāitad a)bhavat/kasmin nu sati **sparsō** bhavati/(kimpratyaya)ś (ca) punaḥ **sparsāḥ**/

2 tasya mama yoniśo (ma)nasi kurvata evaṃ yathābhūtasābhisamaya udapādi/

3 **śaḍāyatane** sati **sparsō** bhavati/ **śaḍāyatana**pratyayaśca punaḥ **sparsāḥ**/

11.1 tasya mamāitad abhavat/kasmin nu sati **śaḍāyatanam** bhavati/kimpratyayaṅ ca punaḥ **śaḍāyatanam**/

2 tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathābhūtasābhisamaya udapādi/

3 **nāmarūpe** sati **śaḍāyatanam** bhavati/**nāmarūpa**pratyayaṅ ca punaḥ **śaḍāyatanam**/

12.1 tasya mamāitad abhavat/ kasmin nu sati **nāmarūpaṃ** bhavati/ kimpratyayaṅ ca punar **nāmarūpaṃ**/

2 tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathābhū-

thābhūtasābhisamaya)udapādi/

3 **bhave** sati **jātir** bhavati/**bhava**pratyayā ca punar **jātiḥ**/)

6.1 (tasya mamāitad abhavat/ kasmin nu sati **bhavo** bhavati/ kimpratyayaś ca punar **bhavaḥ**/)

2 (tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathābhūtasābhisamaya udapādi/

3 **upādāne** sati **bhavo** bhavati/ **upādāna**pratyayaś ca punar **bhavaḥ**/)

7.1 (tasya mamāitad abhavat/kasmin nu sati **upādānam** bhavati/kimprat)yayaṅ ca (punar **upādānam**/)

2 (tasya mama yoniśo mana)si kurvata e(vaṃ yathābhūtasābhisamaya udapādi/)

3 **t(ṛ)ṣṇāyāṃ** sat(yā)m (**upādānam** bhavati/ **ṛṣṇā**pratyayaṅ ca punar **upādānam**/)

8.1 (tasya mamāitad abhavat/kasmin nu sati **ṛṣṇā** bhavati/ kimpratyayā ca punaḥ **ṛṣṇā**/)

2 (tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathābhūtasābhi)samaya udapādi/

3 **vedanāyāṃ** satyāṃ **ṛṣṇā** bhavati/ **vedanā**pratyayā ca punaḥ **ṛṣṇā**/

9.1 ta(sya) mam(āi)tad abhavat/ kasmin nu sati

tasyābhisamaya udapādi<sup>(13)</sup>/

3 **vijñāne** sati **nāmarūpaṃ** bhavati/**vijñāna**pratyayaṅ ca punar **nāmarūpaṃ**/

以上同一構文がくりかえされた。ペーリ本は右の5.1の第三節から12.1第二節までに対応する箇所を省略形で示し、主に縁起支の名をあげるにとどまる。『雜阿含』(二八七)も右の5.1から11.3までを省略形で示し、「如是有・取・愛・受・觸・六入處・名色」という。しかし他の漢訳は全文を掲げる。尤も訳語の特殊なものもあるので、次に縁起支の名称だけについて、表示しよう。(なお漢訳本の順序としては、サンスクリット本と内容的に一致するところの多いものなるべく上の方におくことにした。)

Sanskrit Pali 雜阿含 玄奘訳 支謙訳 法賢訳 增壹阿含 jarāmaraṇa jarāmaraṇa

		老死	老死	老死	老死	老病死
jāti	jāti	生	生	生	生	生
bhava	bhava	有	有	有	有	有
upādāna	upādāna					
		取	取	受	取	受
ṛṣṇā	ṛṣṇā	愛	愛	愛	愛	愛
vedanā	vedanā			痛業	受	痛

sparśa	phassa	触	触	更	触	更	楽
śaḍāyatana	śalāyatana	六入処	六処	六入	六処	六入	六入
nāmarūpa	nāmarūpa	名色	名色	名像	名色	名色	名色
viñāna	viñāṇa	識	識	識	識	識	識
(saṃskāra) (saṅkharā)	(行)	(行)	(行)	(行)	(行)	(行)	(行)
(avidyā)	(aviññā)	(無明)	(無明)	(癡)	(無明)	癡	無明

【右の( )内は還滅分にも無明、行にふれないので、とくに( )内に入れておいた。】

なお以上のサンスクリット文の復元のために用いた写本は必ずしも十分でなからず。5.1は写本(断片)389, BI 1 R 6 (p. 66); BI (2) V 1 (p. 67) 及び 5.2は同 BI (2) V 2-3 にも同じく、右に掲げたように、大部分が括弧内に示した通り、復元したものである。6.1-3には全く写本の支持はなからず。7.1-3は写本断片389, BI (2) R 4-6 (p. 67) の数語によつて復元された。しかし8.2の末尾から12.2まで

(9) Brick II A 4 - tasyābhisamayō babbhūva.

(10) Brick II A 5 nu 欠。

(11) Brick II A 6 nāmarūpam iti

(12) Brick II A 6 kurvata

(13) Brick II A 6-7 - abhisamayō babbhūva<sup>(1)</sup>

13.1 tasya mamāitad abhavat/kasmīn nu sati viññānam bhavati/ kimpratyayañ ca punar viññānam<sup>(2)</sup>

右の部分については問題はなからず。Gopālpur Brick II A 7-8にはほぼ完全な文があるだけではなく、Tripathi が解説した写本 387, 2 R 2-3 (p. 65) (次記) から右の文の存在は知られる。パーリー本 (65.7) の支謙訳、法賢訳にも相当文があり、『増壹阿含』(三八・四)にも右に相当するところがあるといつてよい。しかし、『雜阿含』(二八七)および玄奘訳には右に相当する文はなからず。もっとも『雜阿含』(二八七)は右の13.1の第一節だけに相当する文(「我作是思惟、時」)を有するが、これは14.0に配当することにした。

(1) Brick II A 7 にも nu はなからずが、前にならうて加える。

(2) Brick II A 8 vviññānam iti.

さて問題は次に続く文である。Gopālpur Brick II A 8 以下は直ちに次の 14.1 (但し写本の支持がなからず) まま Tripathi が復元した文を採用しない(以下に続くから、疑問の余地がないかに見える。しかしパーリー本、支謙訳と法賢訳とに

は比較的よい写本 S 527, BI (3) (pp. 72-73) にめぐまれてゐる。また11.3-12.3についても Brick 387, 2 V 1 (p. 64) ~ R 1 (p. 65) にみえる若干の語が手掛りとなった。しかしわれわれは 10.2 の yathābhūtasā- 以下についても Gopālpur Brick II (JRAS 1938, pp. 550f.) を有してゐる。以下にも註記するように若干の語について、中央アジア発掘の写本の文と、相違するところもあるが、この煉瓦に刻された文は、この経の復元のための重要な素材となると考へる。Tripathi が見ていないこの煉瓦刻文のあるところについては、Tripathi の復元本文の括弧を除き、または訂正を試みることも可能となつた。

(1) 以下 (Gopālpur) Brick II A 1 (JRAS 1938 p. 550)

参照。なほその Brick 刻文は区切り線の線 (tanda) はなからず。 Brick II A 1 及び yathābhūtasābhisamayō babbhūva とする。以下おなじく同様。

(3) 以下 Brick II A 2 (p. 551)。

(4) Brick II A 2 (p. 551) 及び puna。

(5) Brick II A 2 及び nu を欠く。以下同様。

(6) Brick II A 3 及び -yaś- はなからずが、解説者 Johnston は「yam」と読め」と註記してゐる。

(7) Brick II A 3 及び -am iti とする。以下にも iti を加へてゐる。

(8) Brick II A 3 - kurvata.

従つて、写本 387, 2 R を見れば、次に復元を試みるように 13.2 があるべきものに考へられてくる。この経の諸異本はこの 13.2 及び 14 の個所において、ほぼ三系列に分かれる。第一は『雜阿含』(二八七) および玄奘訳であり、13.1-3 を含まなからず。第二は支謙訳と法賢訳とであり、パーリー本もこれに属し、ともに 13.1-3 を含む。第三は『増壹阿含』(三八・四) 及び 13.1 と続く、行および無明にさかのぼるものである<sup>(1)</sup>。Gopālpur Brick II は第一の系列に近いが 13.1 のみを含む。写本 387 は第二の系列に属す。これに対して、Tripathi が Lalitavistara (Lefmann ed.) p. 347 を参照して試みた復元は<sup>(2)</sup> はからずも、第三系列の『増壹阿含』の縁起説に類することになつたといえよう。しかしながら、大部分において、サンスクリット本と、もっとも多く相違を示している。そして写本の支持がない以上、この問題の個所についても、サンスクリット本が『増壹阿含』に一致すべきことは、疑わしい。Tripathi が解説した写本の空白の部分については、彼とは別に復元をはからなければならぬであらう。

(1) 「此識何由而有。觀察是時、由行生識。時我復作是念。行何由而生。觀察是時、行由癡而生。無明緣行。行緣識。」(大正・七一八中)

- (c2) (tasya mama yonišo mana)si kurvata evaṃ yathā-  
bhūtasyaḥbhisamaya udapādi/saṃskāreṣu satsu vijñānaṃ  
bhavati/saṃskārapratayaṅ ca punar vijñānaṃ/ (p. 97)  
14 (tasya mamaitad abhavat/kasmin nu sati saṃskārā  
bhavanti/kiṃpratayaś ca punaḥ saṃskārāḥ)  
(tasya mama yonišo manasi kurvata evaṃ yathābhū-  
tasyābhisamaya udapādi/avidyāyāṃ satyāṃ saṃskārā  
bhavanti/avidyāpratayaś ca punaḥ saṃskārāḥ)  
15 (iy avidyāpratayaś saṃskārāḥ/saṃskāraprataya-  
ṅ vijñānaṃ/ (p. 98)
- 40b 写本 387, 2 R は次のように読まれること。(p. 65)  
1 marūpaṃ bhavati vijñānapra///  
2 tasyā mam = etad = abhavat = kasmin///  
3 pratyayaṃ = ca ○ punar = vijñā///  
4 si kurvata evaṃ yathā///

(1) Lies: tasya. (2) K. Sk.: mam = atad =. (3) K. Sk.  
は写本のサンスクリット Korrektes Sanskrit の略記。  
右は Tripāṭhi が解説した 387, 2 R の全文と註記を転写し  
たものである。明らかでないで、その第一行は本経 12. 3 の  
一部にあたり、第二、第三行は 13. 1 にあたる。第四行は  
次のように復元し、13. 2 に該当するものとみられる。

13. 2 (tasya mama yonišo mana)si kurvata evaṃ  
yathā(bhūtasyaḥbhisamaya udapādi/)

vijñānanti// (S. II. p. 104)

(3) 名像故為有識。亦名像因縁復識。

(4) 如是識法因名色有。從名色縁有。此識法。

このあとにどのような文が来るべきか、本経に関する写本  
はどれも、この部分を欠いているので、手掛りとならない。  
パーリー文 (65. 9) は Tassa mayham bhikkhave etad  
ahosi となり、『雜阿含』の「我作是思惟、時」となり、支  
謙訳も「比丘、便思惟、生是意」となり。このことを考慮  
すると、次の一句をここに置くべきかも知れない。

14. 0 (tasya mamaitad abhavat/)

次に来る文 (14. 1) の復元は意味内容の上で困難を伴う。  
まず、次の文がここに来るべき根拠を考える。ここに引いた  
*Mahāvādānasūtra* 9b12 (II. p. 137) を見ると、本経 13. 3  
の文と直ぐに続く

tasya vijñānā(t p)r(a)tyu(dāvarta)\*

...nā(t)p parato vyatirartate/  
と続く。40b 校訂者 Waldschmidt は \*印のふいふ註記つ  
り、

「Pratyudāvaratanam? パーリー pacudāvartati によれば  
pratyudāvaratate を期待すべきであらうが、奪格 vijñānat  
(連字 t-p は「写本」72. 2 に弱く認められる) はパーリー  
と類似の構文に適合しようとしなう。おそらくは、依存の

ことだけでは Tripāṭhi が復元したものに同じである。これ  
に相当する文は前述したように、『雜阿含』(二八七)および  
支謙訳にはなく、Gopālpur Brick II にもない。しかし支  
謙訳および法賢訳には右に相当する文はある。

この次の 13. 3 を復元する手掛りは、『雜阿含』(二八七)  
関係のサンスクリット写本には、管見の及ぶかぎりでは、み  
あたらない。しかし、パーリー本 (65. 8) の支謙訳および法賢  
訳により、40b の *Mahāvādānasūtra* 5b. 12 (II. p. 137)  
を参照すれば、ほぼ次のような復元が可能となるであろう。

13. 3 (nāmarūpe sati vijñānaṃ bhavati/nāmarūpa-  
pratayaṅ ca punar vijñānaṃ/)

これはフルメンツェントが解説復元した *Mahāvādānasūtra*  
9b12 の相当部分と同じである。ここに「わかれわれは  
Tripāṭhi の復元とは異なる結果に達した。

(一) 『雜阿含』(二八七)および支謙訳は、いま復元を試みて  
る 13. 1~13. 3 を含める。Gopālpur Brick II は 13. 1 を  
含むが 13. 2~3 を含まない。即ちこの三者は、識と名色との  
相依相関(相互依存関係)を説かない。しかるに、中央アジア  
発掘の写本 (387. 2 R) によれば 13. 1~2 を含んでおり、続く  
13. 3 を含むように考えられる。すなわち、支謙訳や法賢訳  
と同様に、写本 387, 2 R は識と名色との相互依存関係を説く  
と考えられる。(2) ペーリー上段の図参照)

(2) Nāmarūpe kho sati vijñānaṃ hoti nāmarūpaccayā

連鎖 die Kette der Abhängigkeiten 的 Bewußsein  
から折返して、そしてさらにそれを越えて続かなう、と  
うことが、いわれるはずである。」

という。もう一つ、フルメンツェントの Gopālpur Brick  
II に気がつく必要がある。なかう、なかう、右の *Mahāvādā-  
nasūtra* を参照するときに、中央アジア発掘の本経  
の写本 (387) の本文は Gopālpur Brick II A 8 と続  
いたことを推定し得たかに思える。その Brick II A は  
13. 1 に続いて次記の 14. 1 が来る。しかし、13. 1 と 14. 1 の  
間に、13. 2-3 がある一異本が考えられた。それは、写本  
387 (断片) にも同じく、支謙訳、法賢訳、パーリー本 (65. 8)  
の三本および *Mahāvādānasūtra* 9b 12 を参考にして構  
成された。40b の 14. 1 の前に 14. 0 がある異本が考えられ  
たのは、パーリー本 (65. 9)、『雜阿含』(二八七)の支謙訳から  
構成される可能性による。(4) ペーリー本 14. 0 の存在は意味内容  
としては些細なものであり、13. 3 や 14. 1 の重要性と比すべ  
くもない。

ここで、12. 3 から 14. 1 までについて、諸異本の系統を次  
に図示してみる。(なお○印は存在を示し、空欄はないことを  
示す。?印は破損によって確認できなうとする。×印は別文  
を示す。)



2 tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathābhū-<sup>(3)</sup>  
tasyābhisamaya udapādi/<sup>(4)</sup>

3 jātyām asatyām **jarāmarañam** na bhavati/**jātiniro-**  
**dhāj jarāmarañanirodhaḥ**/

以下同様の構文が(26.3)まで続く。Gopālpur Brick II B 3-5 およびその続きの文は、Tripāthi の復元本と若干の点(註記参照)で異なる。ここでは、前掲 4.1~12.3 にあわせてために、Tripāthi の復元本と同じ結果になった。氏の復元本(16~26)は写本 387, 3~4 (p. 65); 390 (pp. 67-68); 391, (Bl. 17), (Bl. 18) (p. 68); S 399 (p. 69); 525, Bl. 10, Bl. 12, Bl. 13 (pp. 71-72); S 527, Bl. 5, Bl. 7 (p. 73) にもこの通りあり、さらに S. Lévi の解説(JA 1910, II, pp. 438-440)をも参照している。同様の構文が続いているので、殆ど疑いなく復元が可能となる。

(1) Gopālpur Brick II B 3 では nu を次ぎ、kasminn asati という。以下も同様。以下において Tripāthi が用いた写本には nu が明瞭にとめられる。

(2) Brick II B 4 には iti を如え、-nirodha iti とする。以下も同様。Tripāthi が用いた写本には iti がみとめられない。

(3) Brick II B 4: -kurvata. (以下も同様。)

(4) Brick II B 5: -mayo babbhūva. (以下も同様。)

tasyābhisamaya udapādi/<sup>(25)</sup>

3 **vedanāyām** asatyām **trṣṇā** na bhavati/**vedanāniro-**  
**dhāt trṣṇānirodhaḥ**/

21.1 tasya mamāitad abhavat/kasmin nv asati **ve-**  
**danā** na bhavati/kasya nirodhād **vedanānirodhaḥ**/<sup>(28)</sup>

2 tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathā  
bhūtasyābhisamaya udapādi/<sup>(30)</sup>

3 **sparśe** 'sati **vedanā** na bhavati/**sparśanirodhād ve-**  
**danānirodhaḥ**/

22.1 tasya mamāitad abhavat/kasmin nv asati **spa-**  
**rśo** na bhavati/kasya nirodhāt **sparśanirodhaḥ**/<sup>(33)</sup>

2 tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathā-  
bhūtasyābhisamaya udapādi/<sup>(35)</sup>

3 **śaḍāyatane** 'sati **sparśo** na bhavati/**śaḍāyatana-**  
**nirodhāt sparśanirodhaḥ**/

23.1 tasya mamāitad abhavat/kasmin nv asati **śa-**  
**ḍāyatanaṃ** na bhavati/kasya nirodhāt **śaḍāyatana-**  
**nirodhaḥ**/<sup>(37)</sup>

2 tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathābhū-  
tasyābhisamaya udapādi/<sup>(39)</sup>

3 **nāmarūpe** 'sati **śaḍāyatanaṃ** na bhavati/**nāmarū-**  
**panirodhāt śaḍāyatana**nirodhaḥ/

及用いた写本には udapādi とある。

17.1 tasya mamāitad abhavat/kasmin nv asati **jātir**  
na bhavati/kasya nirodhāj **jātinirodhaḥ**/<sup>(3)</sup>

2 tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathābhū-  
tasyābhisamaya udapādi/<sup>(5)</sup>

3 **bhave** 'sati **jātir** na bhavati/**bhavanirodhāj jātiniro-**  
**dhaḥ**/<sup>(8)</sup>

18.1 tasya mamāitad abhavat/kasmin nv asati **bha-**  
**vo** na bhavati/kasya nirodhād **bhavanirodhaḥ**/<sup>(10)</sup>

2 tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathābhū-  
tasyābhisamaya udapādi/<sup>(12)</sup>

3 **upādāne** 'sati **bhavo** na bhavati/**upādānanirodhād**  
**bhavanirodhaḥ**/<sup>(15)</sup>

19.1 tasya mamāitad abhavat/kasmin nv asaty **upā-**  
**dānaṃ** na bhavati/kasya nirodhād **upādānanirodhaḥ**/<sup>(17)</sup>

2 tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathābhū-  
tasyābhisamaya udapādi/<sup>(19)</sup>

3 **trṣṇāyām** asatyām **upādānaṃ** na bhavati/**trṣṇā-**  
**nirodhād upādānanirodhaḥ**/<sup>(20)</sup>

20.1 tasya mamāitad abhavat/kasmin nv asati **trṣṇā**  
na bhavati/kasya nirodhāt **trṣṇānirodhaḥ**/<sup>(23)</sup>

2 tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathābhū-

24.1 tasya mamāitad abhavat/kasmin nv asati **nā-**  
**marūpaṃ** na bhavati/kasya nirodhān **nāmarūpaniro-**  
**dhaḥ**/<sup>(42)</sup>

2 tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathābhū-  
tasyābhisamaya udapādi/<sup>(44)</sup>

3 **viññāne** 'sati **nāmarūpaṃ** na bhavati/**viññānanirod-**  
**hān nāmarūpanirodhaḥ**/

25.1 tasya mamāitad abhavat/kasmin nv asati **viñ-**  
**ñānaṃ** na bhavati/kasya nirodhād **viññānanirodhaḥ**/<sup>(47)</sup>

2 tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathābhū-  
tasyābhisamaya udapādi/<sup>(49)</sup>

3 **saṃskāreṣv** asatsu **viññānaṃ** na bhavati/**saṃskāra-**  
**nirodhād viññānanirodhaḥ**/<sup>(50)</sup>

26.1 tasya mamāitad abhavat/kasmin nv asati **saṃ-**  
**skārā** na bhavati/kasya nirodhāt **saṃskāranirodhaḥ**/<sup>(52)</sup>

2 tasya mama yoniśo manasi kurvata evaṃ yathābhū-  
tasyābhisamaya udapādi/<sup>(54)</sup>

3 **avidyāyām** asatyām **saṃskārā** na bhavati/**avidyā-**  
**nirodhāt saṃskāranirodhaḥ**/

(1) Brick II B 6: kasminn asati.

(2) Brick II B 6: nna.

(3) Brick II B 6: -nirodha iti.

- (4) Brick II B 6: kurvvata.  
 (5) Brick II B 7: -ābhisamayo babbhūva.  
 (6) Brick II B 7: bhava asati.  
 (7) Brick II B 7: nna.  
 (8) Brick II B 7: -nirodha iti.  
 (9) Brick II B 8: kasminn asati.  
 (10) Brick II B 8: -nirodha iti.  
 (11) Brick II B 9: kurvvata.  
 (12) Brick II B 9: -ābhisamayo babbhūva.  
 (13) Brick II B 9: sati. (Johnston は「asati と読め」と註記してゐる°)  
 (14) Brick I B 9: bhavaty.  
 (15) Brick II B 10: -nirodha iti.  
 (16) Brick II B 10: kasminn asaty.  
 (17) Brick II B 10: -nirodha iti.  
 (18) Brick II B 11: kurvvata.  
 (19) Brick II B 11: -ābhisamayo babbhūva.  
 (20) Brick II B 11: tṛṣṇāyāṃ satyām (Johnston は「tṛṣṇāyāṃ asatyām と読め」と註記してゐる°)  
 (21) この文は Brick III A がはじまる°  
 (22) Brick III A 1: kasminn asati.  
 (23) Brick III A 1: -nirodha iti.  
 (24) Brick III A 2: kurvvata.  
 (25) Brick III A 2: -ābhisamayo babbhūva.

- (26) Brick III A 2: vedanāyāṃ asatyāṃ.  
 (27) Brick III A 3: kasminn asati.  
 (28) Brick III A 4: -nirodha iti.  
 (29) Brick III A 4: kurvvata.  
 (30) Brick III A 5: -ābhisamayo babbhūva.  
 (31) Brick III A 5: sparśe sati (Johnston は「asati と読め」と註記してゐる°)  
 (32) Brick III A 6: kasminn asati.  
 (33) Brick III A 7: -nirodha iti.  
 (34) Brick III A 7: kurvvata.  
 (35) Brick III A 8: -mayo babbhūva.  
 (36) Brick III A 9: kasminn asati.  
 (37) Brick III A 10: -nirodha iti.  
 (38) Brick III A 10: kurvvata.  
 (39) Brick III A 11: -yo babbhūva.  
 (40) Brick III A 11: asati.  
 (41) Brick III A 12: kasminn asati.  
 (42) Brick III B 1: -nirodha iti.  
 (43) Brick III B 1-2: kurvvata.  
 (44) Brick III B 2: -ābhisamayo babbhūva.  
 (45) Brick III B 2: asati.  
 (46) Brick III B 3: kasminn asati.  
 (47) Brick III B 4: -nirodha iti.  
 (48) Brick III B 5: kurvvata.

- (49) Brick III B 5: -ābhisamayo babbhūva.  
 (50) Brick III B 6: saṃskāranirodhād 欠。  
 (51) Brick III B 6: kasminn asati.  
 (52) Brick III B 7: -nirodha iti.  
 (53) Brick III B 7: -kurvvata.  
 (54) Brick III B 8: -ābhisamayo babbhūva.

以上、同一の構文が繰返されたが、この縁起の還滅分の逆観においては、行、無明を加える十二縁起となっている。この点はパーリを除く他のすべての異本において同じである。さきの流転分においては十支縁起であった。(但し、『増吉阿舎』および Tripāṭhī 復元本はともに十二縁起をなす)。しかし、パーリ本は還滅分においても十支縁起とする。そして、「識の滅によって名色の滅がある」のみならず、「名色の滅によって識の滅がある」とする(S II, p. 105)。なおこの相互に滅する関係は、次の『雜阿舎』(二八八)(維尾二一八六二蘆經) Tripāṭhī: *Fünfundzwanzig Sūtras des Nidānasamyukta*, Sūtra 6: *naḍakalāpika*, パーリ S XII, 67 *Nalakalapiyam* (S II, p. 112ff.) の蘆束の比喻によってよく説かれる。

(1) 『雜阿舎』(二八七)は右の 17.1~25.3 にあたる個所を省略形で示し、単に縁起支の名称を列記する。またパーリでも 17.1 の終りから 24.1 中間まで省略形である(55, 13; S II, p. 105)。また支譯記は全文を省略なしに繰返すが、訳語が特殊

であり、(その「般は名きに示した」) 夾種といふのが saṃskāra、慧は avidyā に相当するものである。また『增吉阿舎』も癡といふが、無明の語も用いている。

(1) (2)  
 27.1 ity avidyānirodhāt saṃskāranirodhah/saṃskāranirodhād vijñānanirodhah/vijñānanirodhān nāmarūpanirodhah/nāmarūpanirodhāt ṣaḍāyatananirodhah/ṣaḍāyatananirodhāt sparśanirodhah/sparśanirodhād vedanānirodhah/vedanānirodhāt tṛṣṇānirodhah/tṛṣṇānirodhād upādānanirodhah/upādānanirodhād bhavanirodhah/bhavanirodhāj jātinirodhah/jātinirodhāj jarāmarāṇanirodhah/śokaparidevaduḥkhadaurmanasyōpāyāsā nirudhyante/

2 evam asya kevalasya mahato duḥkhaskandhasya nirodho bhavati/

以上が還滅分順観であり、少異を示しながらもすべての異本に相当個所がある。パーリのみは、ここでも十支縁起であり、「名色の滅によって識の滅があり、識の滅によって名色の滅があり」という文を冠する。

『増吉阿舎』はここにおいても他と異なる点が多く、還滅分順観の最後のところは

「生滅則老病滅、老病滅則死滅。是名爲五盛陰滅」(大二七七八中) (\*但し三本によれば「生滅則老病死滅」といふ、) (老病滅則死滅) を欠く。

という。これはさきの流転分順観とは支分の名称を異にしたがらも、縁起支の数を十三とするものであり、独特の説である。また 27.2 に相当する文がない。その代りに次の文を次に置く。

「時我復生<sub>三</sub>此念。此識<sub>三</sub>最爲<sub>三</sub>原首。令<sub>三</sub>人致<sub>三</sub>此生老病死。然不能<sub>三</sub>知<sub>三</sub>此生老病死之原本<sub>二</sub>」(大正、七一八中) (\* 原底本は生之とするが二本による)

またペーリだけは右の 27.2 に相当する文に続いて次の一文(65.18: S II, p.105)を加える。

Nirodho nirodhoti kho me bhikkhave pubbe ananusutesu dhammesu cakkhum udapādi nāṇam udapādi pañña udapādi vijjā udapādi aloko udapādi///

(1) ity は Gopālpur Brick III B9 には欠いており、avidyānirodhāt saṃskāranirodhaḥ の一句をも欠く。Tripāṭhi が解説した写本 S 527, Bl.7 V3 (p.73) によれば右の通りである。また漢訳の法賢訳本はこれに等しいようである。しかし S. Lévi が解説した写本は Gopālpur Brick III B9 と同じく、ity へ saṃskāranirodhaḥ を欠いている(JA 1910 II, p. 440 f.1)。

(2) avidyānirodhāt saṃskāranirodhaḥ の一句は Gopālpur Brick III B9 および Lévi 解説写本にはない。(これは 26.3 の第二句との重複を避けた形になっている) 漢訳の『雜阿含』(二八七) 玄奘訳、支謙訳、『增壹阿含』三八・四も同

とも近いのは玄奘訳の「我復惟、我今証得旧道旧径旧所行跡古昔諸仙之所遊履」であり、『雜阿含』も「我時作<sub>三</sub>是念。我得<sub>三</sub>古仙人道、古仙人迹、古仙人遺跡。古仙人從此跡去。我今隨去」といひ、意は近い。他本は古仙人にあたる語のかわりに、仏、sammāsambuddha の語を出す。なお支謙訳はこの後に、36-37 に相当する文をあげる。

29 tadyathā puruṣo 'raṇye pravāṇe 'nvāhiṇḍann adhigacchet paurāṇaṃ mārgaṃ paurāṇaṃ vartma paurāṇiṃ puṭāṃ pūrvakair manuṣyair yātānuyātāṃ/sa tam anugacchet/sa tam anugacchan sa tatra paśyet paurāṇaṃ nagaraṃ paurāṇiṃ rājadhāniṃ ārāmasaṃ(1) (pannāṃ) vanasaṃpannāṃ puṣkariṇisaṃpannāṃ śubhāṃ dāpavatiṃ(2) ramaṇiyāṃ/

以下 31 までの比喩が「城邑經」(nagara) の名の由来をなすもので、ほぼすべての本に見られる。右は写本 S 399 R 4-5, 400 V 4-R 1 (p.70), S 730/1 A 1-5 (p.78), 等のほか S・レヴィ解説本(JA 1910 II, p.440) によっている。

(1) 以下 S. Lévi 解説本に欠く。

(2) 写本 S 730/1 A 5: dāpavatiṃ; 400a R 1: dāpavati (m). ペーリ uddāpavantaṃ.

30.1 tasyāivam syāt/yan nv ahaṃ gatvā rājña ārocayeyam/

様である。しかし Tripāṭhi が用いた写本 S 527, Bl.7 V 3 (p.73) は右の通りである。なお、法賢訳本はそれに等しい。

(3) Gopālpur Brick (III B12) はこれをもって終っており、以下については参考にすることができない。

以上によって、縁起の観察は一応おわる。Gopālpur Brick も以下を欠いているので、以上については我々は Tripāṭhi の解説し、復元した材料を有するにすぎない。しかし、以下諸異本間の同異を摘記しつつ、中央アジア發掘のサンスクリット文「城邑經」は『增壹阿含』三八・四やペーリ S XII 65 nagaram と異なることを示すことになるであろう。このことはそのサンスクリット文の校訂復元にはまず『增壹阿含』を参照すべきでないということを示しているのである。

28 tasya mamāitad abhavat/adhigato me pauraṇo mārgaḥ pauraṇaṃ vartma pauraṇi puṭā pūrvakair ṛṣibhir yātānuyātā/

この文は写本 391 (Bl. 18) R 5 (p. 68); 393 R 3-4 (p. 69); 400a V 3-4 (p. 70); S 730 A 1-4 (p. 76); X 731 V 2-4 (p. 76) 等から復元できるのであり、さらにレヴィ解説の写本(JA 1910 II, p.440) も参照できる。

ペーリおよび『增壹阿含』にはこの箇所にはこの相当文はない、が後の 32 の位置には相当する文がある。右の文にも

2 a(tha sa puruṣo rājña evam) ārocayet/

3 yat khalu deva jāniyāḥ/ihāham adrākṣam araṇye pravāṇe 'nvāhiṇḍan pauraṇaṃ mārgaṃ (pauraṇaṃ vartma pauraṇiṃ puṭāṃ p)ūrvakair manuṣyair yātānuyātāṃ/so'haṃ tam anugatavān/so'haṃ tam anugacchann adrākṣam pauraṇaṃ nagaraṃ pauraṇiṃ rājadhāniṃ vanasaṃpannāṃ puṣkariṇisaṃpannāṃ śubhāṃ dāpavatiṃ ramaṇiyāṃ/tāṃ devo nagariṃ māpayatu/

右は写本 391, Bl. 19 V 1-R 1 (p. 69), 400 R 1-4 (p. 70) にもとづく。30.2 の復元はペーリによるといふ。ペーリには 30.1 に相当する文はない。また 30.2 に相当するところは

Atha kho so bhikkhave puriso rañño vā rājamahāmat-tassa vā āroceyya /// (65.20: S II, p.106)

とある。rājamahāmat-ta (王の大臣) に言及するのはペーリだけである。『增壹阿含』には 30.1 に相当する文はなく、「遇<sub>三</sub>歸本國」といふ。しかし他の大半の趣旨はすべての本において一致する。

31 atha sa rājā (tāṃ nagariṃ māpayet/sā syād a) pareṇa samayena rājadhāni ṛddhā ca sphītā ca kṣemā ca subhikṣā cākiraṇabahujaṇamanuṣyā ca/

これは写本 400a R 4-5 (p. 70) にのみあり、括弧内はペーリーを参照することにより、復元したものである。法賢訳の『増喜阿含』とは稍詳しいが、他の本も右に相当する文がある。以上が城邑 (nagara) の比喩である。

32 eva(m eva adhigato me paurāṇo mārgaḥ paurāṇaṁ vartma paurāṇi putā) pūrvakair īśibhir yātānu-yatā/  
 右は写本 391 Bl. 19 R 3 (p. 69), 400a R 5 (p. 70) 等により、右に前記の 28 を参照して、復元された。これは玄奘訳によく一致し、『雜阿含』とも意味上一致する。しかしペーリーは īśi (仙人) にあたる語がなく、sammāsambuddha の語を用い、支謙訳と法賢訳とは「仏」となり、『増喜阿含』も「仏」の語を用いるが他と文意はかなり異なるとする。

33 ka(tamaś ca sa paurāṇo mārgaḥ paurāṇaṁ vartma paurāṇi putā pūrvakair īśibhir yātānuyā)ā/  
 右は写本 391 Bl. 19 R 3-4 (p. 69) にのみあり、右に前記の 28 等を参照して復元されたのである。右にちく相当する文は玄奘訳にはあるが、ペーリーと法賢訳とは īśi にあたる語がなく、ペーリーでは sammāsambuddha とする。『雜阿含』、支謙訳、『増喜阿含』には右にあたる文はない。

34 vad utāryāsīā(ṅgo mārgas ta)dyatāḥ samyagdr-

483 V 1-3 (p. 71), 535 Bl. 68 V 1-2 (p. 74) にのみある。これに相当する文は『雜阿含』、玄奘訳、支謙訳およびペーリーにある。また表現が難解であり、内容も稍異なるが『増喜阿含』にも相当文がある。また法賢訳も難解であり、内容も異なるようであるが、老死等の集と滅とを観すること(3)を述べるもの(3)である。

ここで再び縁起の考察が述べられる。ここでも老死から始まる逆観であるが、老死ないし行と、それらの集と、滅と、滅にいたる道とを見たところなのである。しかも釈尊みずからが古仙人の道(サンスクリット文および『雜阿含』、玄奘訳による)たる八正道に従って、右の縁起各支とその集、滅および滅にいたる道とを見た、ところなのである。ここに、八正道と四諦と縁起説との綜合が見られるようである。法賢訳および『増喜阿含』を除いて、ここには無明に言及していない。けだし行の集が無明であるからである。

(一) これは写本 535 Bl. 68 V 1-2 (p. 74) に主により、ペーリーも漢訳諸本も途中を省略した形で述べている。しかし、写本 X 732 V 4-R 4 (p. 77) によれば全部省略なしに同一構文の繰返しである。すなわち

(jātim adrākṣam/jātisamudayaṁ jātinirodham) jātinirodhagāminim pratipadam a(drākṣam) (略)  
 となる。また写本 400b V 1-2 (p. 70) もまた省略なしに述べて

ṣiṅṅ samyaksaṅkalpaḥ samyagvāk samyakkarmanāṅṅ samyagājīvaḥ samyagvyāyāmāḥ (sa)myaksmṛtiḥ samya(ksamādhiḥ)/  
 右は写本 X 732 V 1 (p. 77), 391 Bl. 19 R 4-5 (p. 69), M 726 Bl. 10 V 4 (p. 75) にのみあり、右に相当する文を有するが、ペーリー、『雜阿含』、玄奘訳、法賢訳の四にあり、支謙訳および『増喜阿含』にはない。

35 (a)sau bhikṣavaḥ paurāṇo mārgaḥ paurāṇaṁ vartma paurāṇi putā pūrvakair īśibhir yātānuyā(tā)/  
 右は写本 X 732 V 2 (p. 77) にのみあり、玄奘訳とは右に相当する文がある。ペーリーおよび法賢訳にも右に相当する文はあるが、īśi にあたる語の代りに、sammāsambuddha 「仏」の語を用いている。

36 (tam aham a)nuga(tavaṅ/tam anugacchaṅ jarāma)raṇaṁ (a)drākṣam/jarāmaraṇasamudayaṁ (jarāmara)ṇanirodhaṅ jarāmaraṇanirodhagāminim pratipadam adrākṣam/  
 37 e(yaṁ jātibhavōpādā) natīṣṇāvedanāsparsasaday-

atananāmarūpaviññāṇaṁ saṃskārān adrākṣam/saṃsk(ā)rasamudayaṁ saṃskāranirodhaṅ saṃskāranirodhagāminim pratipadam adrākṣam/  
 右は写本 X 732 V 2-R 4 (p. 77), 400b V 1-2 (p. 70),

30. また、483 V 1-2 (p. 71) は省略形で述べるが、一語一語区切って表格にする (nāmarūpaṁ viññāṇaṁ saṃskārān adrākṣam 以下)。  
 (2) 「便從彼道、即知生老病死所起原本。有生有滅皆悉分別。知生苦・生智・生尽・生道。皆悉了知。有・受・愛・痛・更樂・六入・名色・識・行・癡亦復如是。無明起則行起。行所造者復由於識。」(大正・七一八中)

(3) 「乃可得見彼老死集。是故我証得老死滅。乃至觀見生・有・取・愛・受・觸・六処・名色・識等皆滅。又觀行集亦令行滅。行法滅已無明亦滅。無明滅已即無所觀。」(大正・八三〇中)

38 so'ham imān dharmān svayam abhiññāya sākṣī-krivā) bhikṣuṅgān ārocayāmi/bhikṣuṅgīnāṁ upāsakānām upāsikānāṁ nānātirthyasāramāṇa (brāhma)ṇacara-kaparivṛtjākanām ārocyāmi/  
 右は写本 535, Bl. 68 V 2-4 (p. 74) にのみあり、右に相当する文は玄奘訳および『雜阿含』にある。支謙訳には右の相当文はないが、ペーリーおよび法賢訳と『増喜阿含』とは簡略ながら相当文がある。但し後者は「我今以明於識」に冠する点は独特である。

39.1 tatra bhikṣur api samyakpratipadyamāna āra-dhako bhavati/ārādhayati nyāyaṁ dharmāṅ kuśalam/2 bhikṣuṅgy apy upāsako 'py upāsikāpi samyakprati-

padya(mā)na arādhiḥa bhavati/ārādhayati nyāyaṃ dharmam kuśalam/

右は写本 535 Bl. 68 V 4-R 1 (p. 74), 483 V 5-R 1 (p. 71) にもとづく。右に相当する文は、パーリにはない。玄奘訳、支謙訳には右に相当する文があり、『雑阿含』にも簡略ながら相当文があるが、他の二本にはなくて別な文を掲げる。とくに『増耆阿含』は全く別文をあげ、

「皆当<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>此原本所<sub>レ</sub>起。知<sub>レ</sub>苦、知<sub>レ</sub>習、知<sub>レ</sub>尽、知<sub>レ</sub>道。念使<sub>レ</sub>分明、以<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>六入、則<sub>レ</sub>知<sub>レ</sub>生老病死。六入滅則生老病死滅。是故比丘、当<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>方便、滅<sub>レ</sub>於六入。如<sub>レ</sub>是諸比丘当<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>是学<sub>レ</sub>」(大二、七一八下)

という。六入→生老病死という縁起説をあげるものであり、独特である。

(1) 元、明、聖本では集。

(2) 二本では已。

40 evam idaṃ brahmācāryaṃ vaiśārikam bhavati bahujanyaṃ pṛthubhūtaṃ yāvad devamanuṣyebhyaḥ samyaksuprakāśitam//

これも写本 535, Bl. 68 R 1-2 (p. 74) によっている。右にもっとも一致する文を有するのは、玄奘訳であり、パーリにも相当文がある。『雑阿含』には簡単な文があり、法賢訳にはやや長文が見られる。支謙訳は「如<sub>レ</sub>は無為行者、增多方

トは支謙訳や法賢訳やパーリに近いことになる。なおサンスクリット本にも写本によって若干の相違があることは、すでに見てきた。ともかくも、このようにして、流転分は十支縁起、還滅分は十二縁起とするサンスクリット文が回収され(復元され)た。次には、その意味および思想史上の問題について考察すべき順序であるが、すでに予定の紙数を超過した。よって残された問題については他日に期した。

(1) このあと同写本 353 は次のように読まれたら。(p. 74)

2 (前略) / samanantaraparyāvasitasya vyākaraḥ.

3 nasya m<sup>ti</sup> = iṅ = adhvācanam // 〇//<sup>12</sup>

(11) m の前にはたしかに一語が欠けている。おそらく nagaropamam? そのひまると、その文ではあまり用をなさない。

(12) このあたりに続くテキストのパーリ対応箇所は、Brahmasamyutta の Sanamkumāra (S. 1. 153) と名づけられる縁に見出される。このサンスクリット・テキストの終の部分に La Vallée Poussin, *JRAS* 1911 pp. 773ff. にのべられている。(以上 p. 74 註)

この文はコロフォーンと見做されているが、次に続く縁は『因縁相応』に属せぬ。Sanamkumāra は『雑阿含』(一一九〇)(大二、三三二下)に相当する。またプサンの出したテキストは *Nagaropama et Raksa* と題し、本文に *Nagaropama sūtra* の語を合むが、今の「城邑経」と内容は別である。末尾の

サンスクリット本城邑経(村 上)

至、天亦人已見」という。『増耆阿含』には相当文がない。

以上、城邑経 (nagara) のサンスクリット文を掲げ、パーリおよび漢訳五本との異同を摘記して来た。その結果、中央アジア発掘の写本から復元されるサンスクリット文は、玄奘訳や『雑阿含』により一致を示すのであって、『増耆阿含』とはもっとも隔っている、ということを知った。問題の箇所としての縁起の流転分のサンスクリット文も、写本および銘文に忠実にしたがいがら見ると、十二縁起を説く『増耆阿含』に一致すべきものではなかった。すなわち、流転分においては、行と無明に触れない十支縁起とするのである。流転分を十支縁起とするのは、『雑阿含』(二八七)、玄奘訳、支謙訳、法賢訳であり、パーリは流転分も還滅分も十支縁起とする。流転分逆観を十支縁起とするものも、識と名色との相互依存関係を説くか否かで、二つに分かれる。『雑阿含』(二八七)と玄奘訳とは識と名色の相互依存関係を説かないが、支謙訳と法賢訳とはそれを説き、パーリも同様である。サンスクリット本にも、その両系統が知られた。Gopalpur Brick II, III から知られるテキストは、『雑阿含』(二八七)や玄奘訳に等しく、識と名色との相互依存関係をば記さない。しかるに、中央アジア発掘の写本 387 (断片) によれば、恐らくは識と名色との相互依存関係を記していたかに推定される。その点のみを考えると、写本 387 から想定されるテキス

蛇に対する呪文は『雑阿含』(二五二)(大二、六一上)等 (N. AWG 1957 Nr. 2, p. 40 参照) に相当する。写本 S 527 によれば「城邑経」の後に蛇に対する呪文と *Dasaśalasastra* 1 の始めが続くと云う (MIO, Bd. VI, p. 397 参照) が、M 726, Bl. 10 によれば『因縁相応』の第六経が来るという (Tripathi p. 18)。ともかく、「城邑経」サンスクリット本の本文は上記 40 をもって終る(パーリも同様)。「雑阿含」はこのあとに「仏説此経已、諸比丘聞仏所説、歡喜奉行」といって、法賢訳、『増耆阿含』にも相当文がある。支謙訳は「仏説如<sub>レ</sub>是語、比丘取<sub>レ</sub>著意、仏説行者受<sub>レ</sub>」(\*底本は宜。◎◎による。\*底本は説なし。◎◎による) という。取著意は *atramanas* 即ち他本の歡喜に相当するであろう。玄奘訳は『時諸必芻及諸菩薩摩訶薩等無量大眾、聞<sub>レ</sub>仏所説、歡喜未曾有、皆大歡喜信受奉行』と結び大乘經典の体裁をとる。

(2) 但し最初(1)と最後(前註を見よ)は異なる。

〔附記〕 E. Waldchmidt: *Von Ceylon bis Turfan*, Schriften zur Geschichte, Literatur, Religion und Kunst des indischen Kulturraumes, Festgabe zum 70. Geburtstag am 15. Juli 1967, Göttingen 1967 は本稿でも言及した氏の諸論文を再録している。本稿一註(6)に掲げる氏の論文(最初と最後を除く)はこの書に含まれている。本稿はこの書なしに準備されたが、いま特に改める必要もないようだ。この書には最初に発表された雑誌のページのままで改訂はなし。